

波佐見町鬼木棚田の景観特性に関する研究

永渕 嵩*・今村洋一*・小川進**

A study on the landscape characteristic of Onigi rice terraces in Hasami town

by

Takashi NAGAFUCHI*, Yoichi IMAMURA** and Susumu OGAWA*

Onigi rice terraces were collapsing by the abandon of cultivation and crop diversification at present. Immediate preservation of rice terrace landscape is required. In this study, the authors tried to analyze the structure of rice terrace landscape and extract the characteristics of the landscape. Then, land uses, the state of slopes, the elements of landscapes, and their locations were obtained by the field work and collection of materials. As a result, the characteristics of Onigi rice terraces were different land uses depending on the elevations, old stone structures remained, and three different watersheds in landform. Moreover, point elements of landscapes were houses and temples, while areal elements were stone structures and settlements in landscape of rice terraces. As a total, three rivers form different landscape structures.

Key words : Rice terrace, Landscape, Satoyama

1. はじめに

近年、棚田の景観としての価値が見直されている。それまでの棚田は全国に広く分布はしているものの、多くは山間の地域にあるため注目されることはなく、たまたま道路や鉄道などから見える風景として、一部の棚田だけが世に知られていた。

そもそも傾斜地にある棚田は等高線に沿った特殊な形をしており、一区画の面積が小さいなど生産性の面では平地の水田より劣っている。また、農業機械が入りにくいことや高低差があるため労力が多くかかることにより、耕作放棄地が増え、耕作者の減少とともに多くの棚田が維持できなくなった。

しかし、棚田にはさまざまな機能があることが分かった。水源涵養や保水・洪水対策、土壌侵食や地すべりの防止である。そしてもう一つ注目されたのが日本の原風景としての文化的価値であった。これらの認識により、「第一回全国棚田サミット」の開催や棚田学会の発足、棚田百選の選定など棚田保全の活動が活発になっていった。

長崎県にも現在、鬼木棚田、土谷の棚田、日向の棚田、大中尾の棚田、谷水の棚田、清水の棚田の6つの棚田百選に選ばれている棚田がある(図1参照)。その中の東彼杵郡波佐見町の鬼木郷地域にある鬼木棚田は現在、棚田の放棄や転作により棚田景観が崩れつつあ

る。これは同時に棚田地域の生活と生業の衰退を意味する。それゆえ棚田地域の衰退を止めるには、棚田景観の保全を行うことが必要不可欠と考える。そのためにも、自然と一体になった耕作地や集落などから構成される棚田景観の構造を捉え、維持すべき景観の特徴を理解することが重要である。

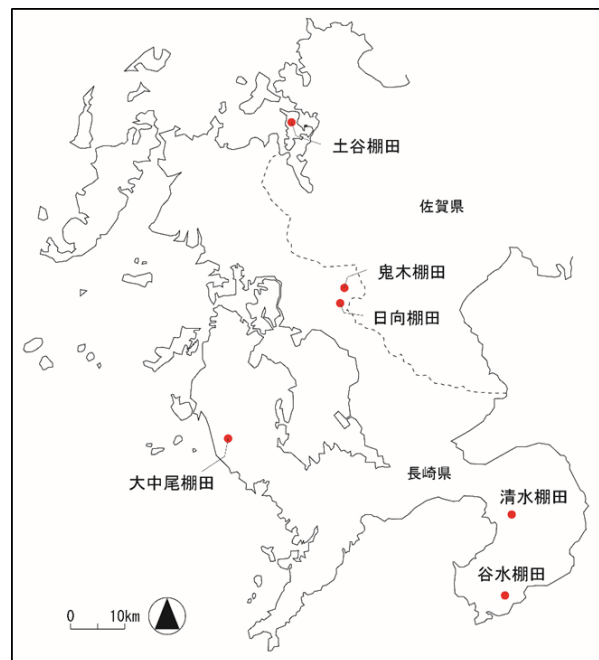


図1 長崎県内の棚田百選の位置

平成29年6月28日受理

* Civil and Environmental Engineering, School of Engineering, Nagasaki University

** School of Culturel-Information Studies, Sugiyama Jogakuen University

また、本研究の目的は、鬼木棚田の景観構造及び景観構成要素の調査によって景観特性を明らかにすることである。また、本研究を行うことで棚田景観の理解と保全の一助となつてほしいと考えている。

2. 方法

土地利用に関しては、現地調査により、水田、畑地、果樹園、耕作放棄地・休耕地、河川、山林、建物（住居、作業小屋）、その他構造物などの現在の状況を調査し、詳細な土地利用現況図を作成する。法面と道路に関しては、圃場整備の範囲を確認し、圃場整備の前後での変化を調査し、現地踏査により、法面の状況（石、土、コンクリート）、畦道の状況の調査や舗装・未舗装、道路管理者（町道、私道、林道）の整理を行う。景観構成要素に関しては、現地調査及び町資料により、文化財、家屋、寺社、石積み、石造物、祠、樹木などの景観資源となる景観構成要素の抽出、位置把握を行い、線的・点的な棚田以外の景観構成要素を表した景観構成要素図を作成する。景観構造に関しては、似たような景観のまとまり（景観単位）をあらわした景観構成図を作成し、谷筋ごとの断面を模式図であらわした景観構造図を作成する。

3. 結果

3. 1 土地利用現況（図2，表1，2）

現在の詳細な土地利用を把握するため、現地踏査を行い、棚田一枚一枚の状況などを確認し、土地利用現況図を作成した。また、地形・道路・地物を元に鬼木郷を上中下流域に暫定的に分け、流域ごとの土地利用の詳細を把握した。

鬼木棚田は主に3つの水系で成り立っている。基本的な耕作状況として、下流域ではほとんどが水田に利用されている。中流域では水田や畑地が多く見られ、茶畑や果樹園も所々に存在する。上流域になると茶畑が多く見られ、棚田の耕作も行われている。また、上流域では、2008年から耕作放棄地になった枚数の割合が36%と最も高いことが確認できた。このことから、上流域で耕作放棄地の増加の傾向が強くていことが分かる。



図2 土地利用現況図

表1 2008年の土地利用状況

	下流域	中流域	上流域	合計
水田(枚)	106	274	148	528
茶畑(枚)	6	49	142	197
畑地(枚)	17	78	75	170
果樹園(枚)	7	23	15	45
合計(枚)	136	424	380	940
水田の枚数の割合	78%	65%	39%	56%

表2 現在の土地利用状況

	下流域	中流域	上流域	合計
水田(枚)	83	221	88	392
茶畑(枚)	3	39	114	156
畑地(枚)	22	73	28	123
果樹園(枚)	7	21	14	42
耕作放棄地(枚)	21	70	136	227
合計(枚)	136	424	380	940
水田の枚数の割合	61%	52%	23%	42%
耕作放棄地の枚数の割合	15%	17%	36%	24%

3. 2 圃場整備と棚田法面の状況（図3，4，写真1～3-2）

鬼木郷では新農業構造改善事業（S59）などが行われたが、行政資料が散逸して正確な圃場整備範囲は分からないため、ヒアリングから範囲を推定した。圃場整備前の棚田は石積みで区画の面積は小さいが、圃場整備後は法面が土坡に変わり、棚田は統合され区画の面積が大きくなった。また、図2から分かるように開田川周辺ではほとんどが石積みであるのに対して、中ノ川内川周辺では土坡が多く見られる。大鬼木川周辺では主に下流域で土坡、中上流域で石積みが見られ

る。

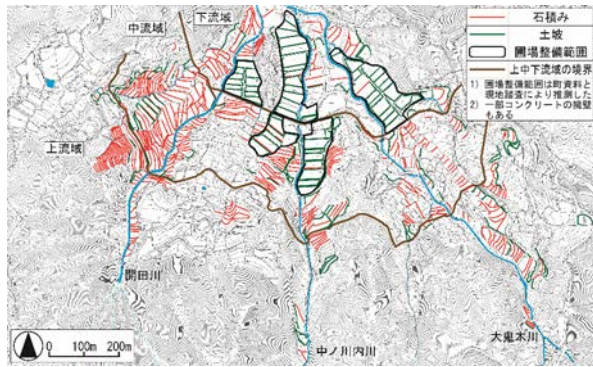


図3 圃場整備の範囲と棚田法面の位置



写真3-1 大鬼木川周辺の土坡の景観



写真1 開田川周辺の石積みの景観



写真3-2 大鬼木川周辺の石積みの景観



写真2 中ノ川内川周辺の土坡の景観

3. 3 棚田以外の景観構成要素 (図4, 写真4~9)

棚田以外の景観構成要素としてまず挙げられるのは鬼木郷集落の家屋である。地元住民によれば、鬼木郷の家屋は建てられた当初全て藁ぶきの屋根であったことが分かった。現在では小屋上げにより瓦やトタンにふき替えられ、藁ぶきの家屋は残っていない。しかし多くの家屋はほぼ同じ形の入母屋屋根にふき替えており、統一感のある景観となっている。また、目視により39棟の建物は戦前建築という推測が得られたことや、その内の数件で屋内の造りが建てられた当時のままであることが確認できたため、歴史的な価値もあると考えられる。その他の景観構成要素には、3か所の御堂や6か所の記念碑などがある。

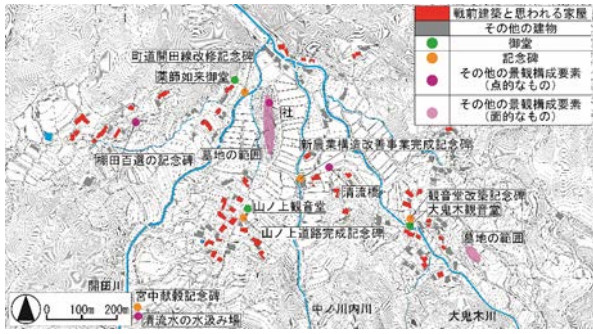


図 4 景観構成要素



写真 6 藁ぶき屋根の川添邸



写真 4 渋江邸



写真 7 瓦屋根の川添邸



写真 5 福田清人氏の生家



写真 8 山ノ上観音堂



写真9 大鬼木観音堂

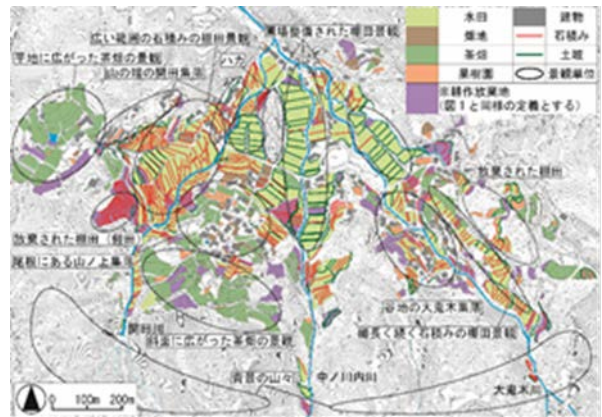


図5 景観構造図

3. 4 鬼木郷の景観構造 (図5, 図6)

鬼木郷の景観構造は主要3河川の谷筋ごとの断面構成から把握したが、開田川については左岸と右岸で景観構造が異なるため、分けて把握した。

(1) 開田川の左岸の景観構造

下流域から石積みの棚田が広がるが、中流域の傾斜が急になる標高150~200mに石積みの棚田が集積している。上流域のさらに急な勾配の斜面に鎧田(カブト田との説もあり)と呼ばれる石積みの棚田があるが、現在は耕作放棄地となっており、林道を超えたその上方は杉林となっている。

(2) 開田川の右岸の景観構造

下流域では緩傾斜の斜面に圃場整備された土坡の棚田が広がっている。その他に島状の丘上の墓地が存在する。中流域の尾根部分、標高150~200mには山ノ上集落があり、集落内は家屋や茶畑、その他の畑地などが混在している。標高200m以上の上流域には、段畑状の茶畑が広がっている。

(3) 中ノ川内川の谷筋の景観構造

下流域から中流域にかけての緩斜面は、圃場整備された土坡の棚田景観である。中流域から上流域にかけて、やや斜面が急になるが、開田川の左岸、右岸ほどではない。谷奥の標高200m付近に茶畑があり、それより上方は耕作放棄地や杉林が続く。

(4) 大鬼木川の谷筋の景観構造

下流域の緩傾斜の斜面は、圃場整備された土坡の棚田景観である。標高150m付近に大鬼木集落があり、その上方の棚田は石積みである。中流域から上流域にかけて、やや傾斜が急になるが、こちらも開田川の左岸、右岸ほどではない。谷奥の標高200m付近に墓地があり、その上方も標高230m付近まで石積みの棚田の景観である。それ以降、耕作放棄地、杉林が続く。

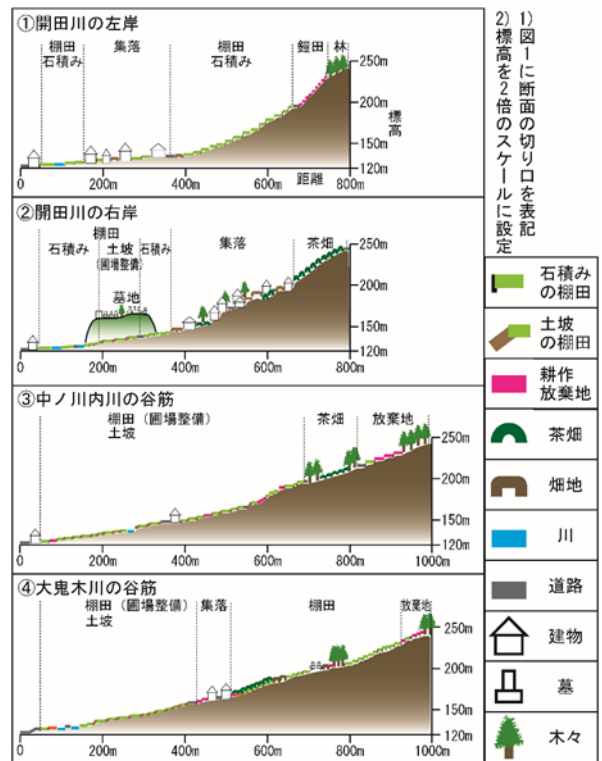


図6 景観構造図

4. 結論

鬼木棚田の特徴は高所と低所で土地利用が異なる点、圃場整備は行われたが古い石積みが多く残っている点、地形が異なる3つの谷筋に拓かれている点である。さらに家屋や御堂などの点的な景観構成要素と石積みの景観や集落などの面的な景観単位が棚田景観を構成している。そして、これらの特徴と景観構成要素、景観単位によって開田川左岸、開田川右岸、中ノ川内の谷筋、大鬼木川の谷筋で異なる景観構造を持つことが鬼木棚田の景観特性である。

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々にご指導、ご鞭撻のほど賜りましたことをこの場をお借りいたしまして深くお礼申し上げます。また、ゼミや日々の研究において貴重なご意見やご指摘をしていただいた先生方や研究室の皆様に感謝したい。さらに、資料提供や現地調査にご協力していただいた岡林先生、波佐見町役場農林課農林土木係の方々、鬼木郷の地域住民の方々にも改めて感謝したい。

参考文献

- 1) 横関 隆登, 小野 良平, 伊藤 弘, 下村 彰男: 新潟県十日町市松之山地区にみる棚田景観地の景観構造に関する研究, ランドスケープ研究 76 (5), pp.583-586, 2013
- 2) 中島峰弘「日本の棚田ー保全への取り組み」, pp.21-44, 238-249, 古今書院, 2000年
- 3) 波佐見史編纂委員会「波佐見史 上巻」波佐見町教育委員会, pp.44-45, 393-397, 1976
- 4) 波佐見史編纂委員会「波佐見史 下巻」波佐見町教育委員会, p.450, 1981
- 5) 「やきものの町波佐見町へようこそ！」
www.town.hasami.lg.jp/ 12月10日アクセス
- 6) 「棚田学会」tanadagakkai.com/ 12月27日アクセス